令和元年度認定（No.８９）

農　業　名　人

キュウリづくり名人　小林（こばやし）　雄一（ゆういち）

昭和３２年生まれ　飯島町在住

「一生迷人」

長野県農業大学校を卒業後、伊南農業協同組合（現上伊那農業協同組合）の米穀技術員として管内の技術指導に関わってきた。現在の働き方改革の時代とは違い、当時は農家の不安を少しでも払拭するため、早朝から夜遅くまで農家を巡回し、新入社員の歓迎会にも行けなかったと語る。

平成３年に農協の広域合併が論議されている頃、自身の両親や子供のことを考えて退職することを決断し、３４歳で父親のキュウリの経営を引き継ぐ形で就農した。

その頃の飯島町では、キュウリや鉄砲百合が盛んに生産されており、市場からも一目置かれる存在であった。市場で産地として認めてもらうためには、キュウリで日量１０トン以上を出荷できる地域でないと扱ってもらえないため、産地が継続されるよう試行錯誤を繰り返してきた。キュウリの産地を守ることで、地域が守られ、町の活性化に繋がると、産地の育成に努めた。

現在は、施設２棟、２０アールで夫婦を主体とした労働力で、春キュウリと抑制キュウリの２作延べ４０アールの栽培を行い、規格品と直売を合わせて年間８０００ケース、４０トン出荷している。特に、化学肥料は極力使用しない健康な土づくりに努めており、中島農法の一部を取り入れ、ボカシ（放線菌類）を使って土壌の物理性と微生物を活かしたキュウリづくりを行っている。「１３００本の苗を同じように植えても、それぞれ個性があって、人間の思い通りにはいかないため、個性を上手く引き出せるよう、毎年迷いながら前に進むことが大切」と語り、栽培へ愛情が溢れている。

地域の農業振興にも積極的に関わっており、本郷地区の担い手法人である有限会社本郷農産サービス（現株式会社本郷農産）の設立に尽力し、同時に代表取締役を平成１８年から７期に亘り務められている。また、若手農業者の育成にも力を入れており、県の里親登録も受け、これまでに２名がキュウリ農家として独立・自営就農している。令和２年現在も、農業研修生の受け入れを行っており、生産振興と品質向上に力を注いでいる。